

観音物語 (24) 宇宙の響き

みょうおんかんぜ おん ぼんのんかいちようおん しょうひ せ けんのん ぜ こしゅじょうねん
妙音観世音 梵音海潮音 勝彼世間音 是故須常念

妙音 観世音 梵音 海潮音 彼の世間の音に勝れり 是くの故に須らく常に念ずべし

ケネディー大統領の暗殺事件がテレビ画面で全世界に流れた。世界最初のテレビ実況中継である。このとき、アンネ・ベレンスは東洋哲学の研究で高野山にて四十日間の滞在をしていた。彼女は米大統領の暗殺画面に釘づけになった。毎日、毎日、泣き崩れている。気晴らしに彼女を伽藍へ連れ出した。

大塔の鐘がゴォオンと鳴る。その響きは七、八キロ先まで伝わっていく。巨大な音響である。しかし、鐘の真下においても鼓膜が破れるわけではない。梵鐘の響きは不思議だ。日本の音色である。梵鐘に胸を打たれたキリスト宣教師が仏教に転身した外国人もいるほどの妙音である。

梵鐘は腕の力だけでは撞けない。全身に体重をかけて打ちつける。堂守は杵を空ぶりをしておいてから、両足を揃えて踏み石にふんばり、魂をぶつける。この大響音はまさしく妙音であり、梵音であり、観世音である。荘重な響きが潮騒になって広がっていく…。

泣き止まぬアンネ・ベレンスに梵鐘を一つ撞かせてみよう、と、堂守に頼んだ。一つだけ撞くことが許された。堂守の鐘を撞く要領を会得した彼女は、鐘の真下に立ち、杵の鎖を握った。一回、二回、三回、四回と空ぶりをして十回目に両足をふんばって全身を後ろに倒した。

ゴォオン～

この一打でベレンスは泣くことはなくなった。

アンネ・ベレンスの友人に宇宙音響の受信装置を開発した白髪老人がいる。彼は五十年前に恩師に叱られたことを思い出している。

「お前はここで学ぶ資格はない。トットと消え去れ！」

叱責された悔しさが忘れられず、それから出家して猛勉強を始めて五十年になる。宇宙の響きをキャッチする研究を生涯にわたって実験してきたのである。

須弥山の頂上で銀河の中心へ宇宙音響装置を向け、梵語の「オン」を唱え続けていると宇宙音とオンが融合して美しい波長が現れる。この分析で宗教科学アカデミー賞を受けた。将来の夢は宇宙人と交信することである。恩師の叱責でなしとげた宇宙開扉である。

宇宙の響きは日本の梵鐘の音とよく似ていて、超巨大な波長が宇宙に充満している。音が大きすぎて人間の耳には聞こえない。しかし、宇宙音の振動は動植物の声になって、鳥がさえずり、クジラがなき、草木がささやき、川がさざなみ、岩礁がさわぐのである。楽器も、歌手も、街の騒音も、世間のいたるところで宇宙の響きが振動している。音声はまかふしぎだ。

観音さまの耳は大きい。小言でも、反対意見でも、観音さまは静かに耳を傾けておられる。自分の都合のいいことだけを聞いて、あとは知らん顔をされない。観音さまはよく説法なさるが、またよく傾聴される豊かな福耳である。あらゆる響きは観音さまの説法である。耳を澄ませてごらん…。ゴォオン～…、ゴォオン～…、…、…、